第1特集

子どもの育ちの「見える化」で保護者にもっと信頼される園になる

保護者との関係構築のために、さまざまな工夫をされている園は多いでしょう。
信頼を得るためには園の理念や日々の様子を伝えることが大切です。
園のありようが保護者にしっかりと見えるためには、何をどのように伝えればよいかを考えます。

インタビュー

「学び・育ちの物語」で園を「見える化」する

保育の成果はすぐに目に見えるものではありませんが、
日常のささいな場面でキラリと光るようにして表れることがあります。そのような子どもの育ちを見逃さず、
「学び・育ちの物語」として保護者に伝えることで信頼関係はさらに深まるでしょう。

「ブラックボックス」である園を保護者に向けて「開く」

保護者には園の様子がそもそも伝わりにくい

多くの園では、保護者に対する情報発信を大切にしていることと思います。しかし、それにも関わらず、保護者にとって園は「ブラックボックス」であることが珍しくありません。それは、園が伝える情報が活動中心の発信になりがちで、保育者がどんな働きかけを行い、子どもがどう成長したかを十分に伝えることが難しいからです。その背景には、そもそも、幼児教育の成果が目に見えにくいものだということもあるでしょう。

そのため、保護者は日常的に園でどのような活動が行われ、わが子がどう育っているのかを、ほとんど知らないということを踏まえて話さなければ、求められている情報を発信できず、信頼関係も深まりません（3ページ　図1参照）。

保育は目先の成果を目指していませんから、学校のようにテストなどで成果を数量化することはできません。そのため、保育の特色として「遊びや生活を大切にしている」といったメッセージを伝えることになりますが、どの園も似通っていて、なぜ大切なのかを説明することが難しく、保護者には園ごとの違いが伝わりにくいことがあります。

一方で、特別な活動をアピールする園も増えていますが、それだけでは、幼児教育の本質である遊びや主体的な活動の大切さを伝えたことにはならないでしょう。

玉川大学教育学部
乳幼児発達学科准教授
大豆生田啓友
おおまめうだ・ひろとも
専門は、幼児教育学・保育学・子育て支援。編著書に『これでスッキリ！ 子育ての悩み解決100のメッセージ』（すばる舎）、『よくわかる子育て支援・家族援助論』（ミネルヴァ書房）など。

子どもの変化、成長を効果的に伝える「学び・育ちの物語」

保育者が語り合う園の風土が「学び・育ちの物語」を生む

どの園でも、大切にしている保育の方針や特色があるはずです。では、保育の特色を効果的に発信するためには、どのようなポイントを押さえればよいのでしょうか。

私が、保育の内容がすばらしく、保護者との信頼関係も深いと感じる園には、興味深い共通点があります。それは保育者同士が、日頃から子どものよさや成長などを語り合う風土があることです。「○○ちゃんがこんなことをしていた」といった子どものよさや育ちを語り合う中で、単なるエピソードが「学び・育ちの物語」、つまりその子の変化、成長の物語へと変化し、それが保護者にも伝わって、信頼関係が育まれているのです。

単に「今日は砂遊びをしました」など、活動の事実を伝えるだけでなく、その中での子ども一人ひとりの思いや変容、保育者の意図や関わりを織り交ぜたものが、「学び・育ちの物語」なのです。

「学び・育ちの物語」を伝えて保護者との信頼関係を築く

「学び・育ちの物語」を考える上で参考になる例をご紹介します。

ある母親は、3歳で入園した娘が当初、なかなか他の子どもと遊べず、いつ見てもひとりで過ごしていることがとても気になっていました。3歳ですからひとり遊びは珍しいことではありませんが、母親はとても不安だったそうです。

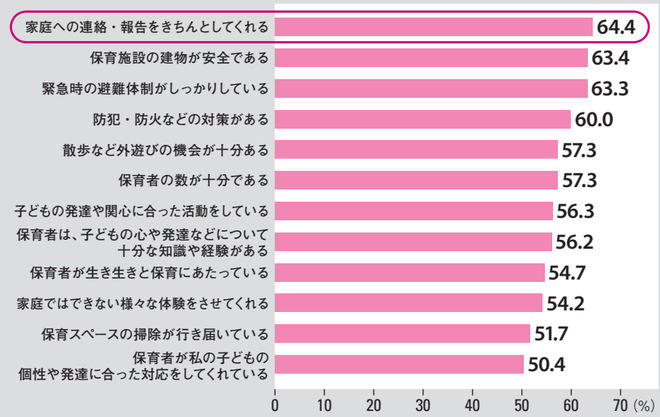
その状態が続いたため、母親は勇気を出して担任の保育者に相談しました。すると、保育者は「十分にお伝えできていなくてごめんなさい。お母さまとしては心配ですよね」と母親の気持ちを受け止めました。そのうえで「入園後しばらくは、緊張していてあまり積極的に遊びにとりかかろうとはしなかったですね。でも、周りの子の遊びをじっと見ていることが多くありました。私としても、声はかけていたのですが、手を出そうとはしないことが多かったんです」と、これまでの様子を伝えました。

そして「その後、ほかの子の遊びにとても興味を持ちだしたようです。今日も、砂場でプリン作りをする他の子たちのすぐそばで、自分も砂のプリンを作っていました。直接はかかわっていないけれど、気持ちは一緒なのだと思います。本人に

図1 参考データ

保護者が園に最も重視しているのは「家庭への連絡・報告」

保育施設の環境や設備、保育者などについて、お子さんを保育施設に預ける中で、あなたが重視していることについて、それぞれ、お気持ちにもっともあてはまるものをひとつずつ選んでください。



※「きわめて重視している」と回答した割合が50%以上の12項目を掲載。
※子どもを保育施設・サービスに預けている母親（607人）の回答。
出典／ベネッセ次世代育成研究所「2009年～2011年　首都圏“待機児童”レポート」（2012）

とってこれはとても大きな変化ですよ」と、変化を語りました。

さらに、「今はまだ、他の子との直接的なかかわりはほとんどないけれど、時間の問題だと思っています。だから、私が間を無理につなぐよりも、子ども同士が遊びをきっかけにつながるチャンスを待ちたいと思っています」と保育者の思いを語りました。

こうした保育者の言葉を聞いて、保護者はとても納得しただけでなく、保育者がわが子を丁寧に見てくれていることを実感し、とてもうれしく感じたそうです。

「学び・育ちの物語」を伝える4つの大切なポイント

一般論にとどまらず「我が子の物語」にする

ご紹介したように、子どもの成長を物語として伝えるためには、4つのポイントがあります。

ポイント❶ まず、保護者の気持ちを受け止めることです。保護者の不安や悩みがたとえささいなことであっても、「お母さまとしては心配ですね」と保護者の気持ちを受け止めたうえで、どんな思いなのか、聞く姿勢を大切にしましょう。

ポイント❷ 子どもの変化をよく観察して、エピソードとして伝えることです。先ほどの例では、一見、一人で砂場で遊んでいるだけに見えますが、実はその中身は変化しています。それを具体的に伝えることで保護者は安心します。例えば、連絡帳に「ダンゴムシ集めを楽しみました」と書くだけでは、単なる情報提供に過ぎません。「○○くんと一緒に探すうちに、『暗いところに多くいる』ことを発見して喜んでいました」「ワラジムシとの見分け方を友達に教えていました」など、その子がどれだけ夢中になって探究していたか、また他の子どもとどうかかわり協同していたかといった内容が加わることで、情報にドラマ性が生まれます。もちろん、このようなドラマを生み出すためには、子どもの探求心や協同性を信じつつ、子どもが主体的にワクワクしながら活動できる環境を整える「保育者のしかけ」が必要であることは言うまでもありません。

ポイント❸ 現状とともに、これからの関わりや見通しを話すことも大切です。先の例で言えば、「直接的なかかわりは今はないけど、時間の問題だと思う。子ども同士が遊びをきっかけにつながるチャンスを待ちたい」と伝えたことで、保護者は安心感を得ました。

ポイント❹ 保育者が自分の思いを自分の言葉で語ることも重要です。もし、この場面で「3歳児のひとり遊びは普通のことです」と一般論を伝えるだけであれば、保護者の不安は解消されなかったでしょう。保育者が子どもの実態に合わせて「私は子ども同士がつながっていくのを見守りたい」と自分の思いを話したからこそ、保護者の心に響くアドバイスとなったのです。

「学び・育ちの物語」を伝える4つのポイント

❶まずは保護者の気持ちを受け止める。
❷子どもの姿をよく観察して育ちの変化を伝える。
❸保育者のこれからの関わりや見通しを説明する。
❹保育者自身が自分の言葉で思いを伝える

「学び・育ちの物語」の発信は保育の向上にもつながる

連絡帳やおたよりでの一文が園への印象を変える

「学び・育ちの物語」というと、起承転結で構成された文章を連想し、負担に思う方もいらっしゃるかもしれませんが、そんな難しいことではありません。連絡帳やおたよりに子どもの具体的な姿に関する一文があるかないかで、受け取る側のイメージは全く違います。子どもの様子に関する具体的な記述が一文入るだけで、「丁寧に見ていることが伝わる」「家での話題になる」「先生がどんな思いでかかわっているかわかる」と保護者は安心し、満足するはずです。

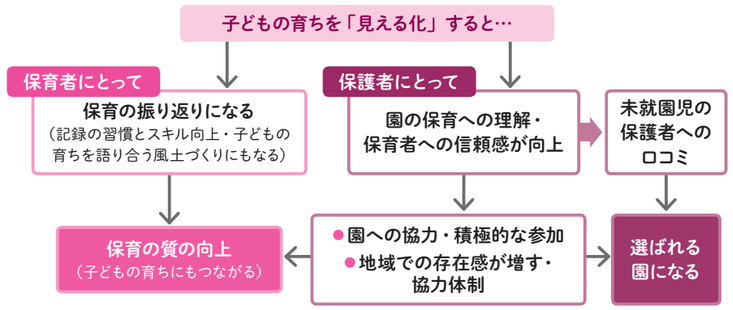
連絡帳を書く際には、保護者の気持ちになって書くことを考えてみてください。文章としての体裁を整え、誤字脱字をなくすことも大切ですが、保護者が元気に子育てに向かえるようなメッセージが何より重要です。それができたとき、連絡帳は、子育て支援の重要なツールとして機能します。

ファンが増えることで園の保育がよりよくなる

「学び・育ちの物語」を効果的に伝えることで、保護者の中に園に対するファン、応援団が増えていくでしょう。ファンになった保護者は、園の活動に積極的に参加してくれるはずです。私の知るある園は、園の活動に対する保護者の参加率が非常に高いのですが、それは決して強制ではなく、「子どもの姿をもっと見たい」「楽しい活動に参加したい」といった保護者の自主性に支えられています。

当然、参加したくないという保護者もいます。そうした保護者はまだ園のファンになっていないのかもしれません。しかし、丹念に「学び・育ちの物語」を語り、保育の面白さや子どもの育ちの豊かさを伝えれば、保護者がファンに変わる可能性は大いにあります。そうして、ひとりまたひとりと保護者を巻き込むことで、子どもを取り巻く環境はより豊かになり、ひいては園の保育そのものの質向上に確実につながっていくのです（図2）。

図2 育ちを「見える化」することのよさ



現場のみなさんへ

多くの先進国では幼児教育の重要性が認められ、保育者の仕事がとても大切なものであると考えられています。しかし日本では残念ながら、保育者はまだ適正な評価を受けていないと感じます。保育を見る保護者の目を豊かにすることも、保育者の役割なのかもしれません。毎日忙しいとは思いますが、保護者への伝え方を少し工夫することで、幼児教育に対する理解が進み、保育者との信頼関係が強固になり、結果として保育の質が高まるのではないでしょうか。

事例 1

連絡帳で一人ひとりの成長を発信し子どもの世界の面白さを伝える

港北幼稚園（神奈川県・私立）

子どもが遊びの中で育っていることを保護者に実感してもらううえで港北幼稚園が重視しているのが、連絡帳による情報発信です。「交換日記」のようなやりとりを通し、子どもを共に育てる良好な関係も育っていきます。

保護者と子どもの育ちを共有して協力関係を育む

連絡帳のやりとりを通し保育について「解説」

「子どもの世界は面白い」と保護者に実感してもらうことが、共に子どもを育てる関係づくりの出発点になる、それが港北幼稚園の保育の基本となる考えです。学校法人渡辺学園理事長の渡邉英則先生は次のように話します。

「子どもは楽しい活動だけではなく、ケンカをしたり葛藤をしたりしながら育ちます。その中で子どもなりに一生懸命に考え、感じており、そこから大人が学べることは少なくありません。まずは保護者のみなさんに、そうした子どもの世界を理解していただきたいと思っています」

その一環として保護者のサークル活動を充実させています。例えば、「おはなしの部屋」は、保育時間中に子どもたちに絵本の読み聞かせをするというサークル活動で、約90名の保護者が登録しています。また「ガーデニングの会」は、子どもと一緒に花壇の整備や野菜の収穫を楽しむというものです。こうした活動を通し、子どもの反応をダイレクトに感じることで、保護者の子ども理解を深めると共に、保育活動の理解も深まっていきます。

サークル活動は、保護者の側から子どもの世界に入っていく体験です。子どもの世界を実感するにはよい方法ですが、これだけでは十分ではありません。

「子どもの世界を知るには、保育者が間に入って『解説』することも必要です。そこで日頃から保護者にお会いしたときには口頭で子どもの姿を伝えると共に、連絡帳のやりとりを大切にしています」（渡邉先生）

文章化することで育ちを実感しやすくする

連絡帳には特別な形式があるわけではなく、一般的なA6版のノートを使用しています。一定の枠を設けないほうが、その日のできごとによって文章量を調整できるなど、使い勝手がよいという考えです。

年度当初の保護者会では、連絡帳は「園と家庭を結ぶ大切なノート」であると強調し、気づいたことや悩み、相談があれば、小さなことでも書いてほしいと伝えます。そのため頻繁に提出する保護者もいて、まるで「交換日記」のように、やりとりが続くこともあります。

学校法人渡辺学園 理事長
港北幼稚園
渡邉英則先生

4歳児担任
鈴木真美先生

保育者が連絡帳を記入するうえで特に重視しているのが、一人ひとりの育ちを具体的に伝えることです。

「連絡帳の記入では、客観と主観の両方を大切にしています。子どもが遊びの中で育っていく姿を客観的に伝えるとともに、それに対する保育者の主観的な見方を提示することで、園としての保育観が伝わると考えています」（渡邉先生）

連絡帳には、会話とは異なるメリットがあるといいます。4歳児担任の鈴木真美先生はこう語ります。

「保護者からは、『文章にしてもらうことによって成長を実感できる』という声をいただいています。そこでエピソードやそれに対する私の考え、気持ちなどを丁寧に書きつづっています」

子どもが発した印象的な言葉なども、文章にすることでより伝わりやすくなります。また、ふだんは園を訪れることが少ない父親や祖父母が読めるというよさもあります。

「書くことがない」状態は保育に問題があることも

連絡帳のやりとりを通し、保護者にはどのような変化が表れるのでしょうか。

「大人の価値観で子どもを見ていた保護者が次第に変わっていきます。例えば、『言うことを聞かないときは、子どもが自分の思いをもって別のことに集中している場合もある』などと、子どもの側から考えられるようになります。むろん、こうした変化は連絡帳だけではなく、日頃の会話や保護者活動なども大きく関係します。しかし、子どもの見方を広げていくうえで連絡帳が欠かせない役割を果たしているのは確かです」（渡邉先生）

保育者にとっても、連絡帳は貴重な記録となります。鈴木先生は、成長の節目だと感じられるエピソードがある連絡帳はコピーして手元に残し、指導要録などの記入時に参考にしているそうです。また過去の連絡帳に目を通すことで、子どもの育ちを振り返り、保育の手立てを考える材料にもなります。

日々の連絡帳の記入は、保育者の力量の向上にもつながります。

「『連絡帳に書くことがない』という状態は、書くべきエピソードが起こらなかった、あるいは子どもの学びや育ちを発見できなかったということです。また年度の初めと終わりに同じようなことを書いている場合も、子どもの育ちを十分に見とれていないことの表れです。連絡帳に書きたいことがたくさんあるほど、保育は充実し、保育者としての視点も豊かであるといえます。今後も連絡帳を貴重な材料のひとつとして、保護者とともに保育を充実させていきたいと思います」（渡邉先生）

連絡帳のやりとりと感想の一例　4歳児クラス　男児Aくん

保護者より

11月△日
今朝、給食が食べられるか急に不安になったようで、「今日は食べない……」と、ぐずりながら登園しています。お友だちと一緒だと大丈夫とは思いますが、様子を見ていただけますか。

担任からの返事

11月△日（当日）
実際はおかわりをしてモリモリ食べていたのでご安心ください。Aくん自身も「がんばって食べた」という思いがあったようで、「おいしかった〜」と嬉しそうでした。献立のことなど、おうちでいろいろと考えて不安になってしまったのかなと思いますが、幼稚園に来ると気持ちの切り替えができるようになってきたのではないかと思います。

連絡帳のやりとりを行った後

保護者の感想
「先生がちゃんと見ていてくれてよかった。伝えてよかった」と思いました。預かり保育を利用しているので、普段はなかなか担任の先生に会えません。電話も難しいので息子に変化が見られたときに連絡帳を活用しています。情報共有ができ、文字に残るのもうれしいです。

担任の感想
連絡帳は、保護者が書きたいときに書くという位置づけなので、「園に行きたくない」などの気になる姿を書かれることはよくあります。園でも気にかけるようにしますが、先入観をもち過ぎず、その子の「園だからこそ見せる姿」「園でしか見せない姿」も伝えたいと思って返信しています。

港北幼稚園
◎保育方針は、「生き生きした子ども」「思いやりのある子ども」の育成。保育に保護者との連携は欠かせないという考えから、「おはなしの部屋」「ガーデニングの会」「おしゃべり会」「港北キッチンクラブ」などサークル活動を充実させている。
園長　渡邉シズ先生
所在地　神奈川県横浜市都筑区早渕3-35-25
園児数　290人（3〜5歳児）

事例２

具体的な個人記録を定期的に発信し「心の育ちのストーリー」を伝える

長房西保育園（東京都・公設民営）

長房西保育園は、日常の園生活を通じた子どもの育ちを伝えるために、「育ちのカルテ」ともいえる丁寧な個別記録「あゆみノート」を作成しています。写真やエピソードを通し、子どもの育ちの物語を具体的に伝えられるのが、あゆみノートのよさです。

エピソードとその解説で、子どもの育ちを「証明」

育ちのストーリーを伝え子どもの見方を広げる

保護者が知りたいのは、「日常の子どもの姿」です。しかし、イベントなどで子どもの様子は見られても、日常的に園でどのように遊び、育っているかを実感する機会はあまりありません。

そこで長房西保育園では、具体的なエピソードを充実させた個別記録「あゆみノート」を作成して保護者に子どもの育ちを伝えています。

あゆみノートはＡ４用紙一枚で、表裏に記入スペースがあります。表面には写真とエピソードを交えて一人ひとりの育ちを自由に記入します。いわば、「育ちのカルテ」のような内容です。また裏面は一人ひとりの保育目標とその達成に向けた保育者のかかわり、評価・反省などで構成されます。保護者が家庭での子どもの姿を書くスペースも設けています。このあゆみノートを、０～２歳児は毎月、３～５歳児は年３～４回作成しています。

長房西保育園 園長
島本一男先生

表面は自由度が高い反面、「何を書けばいいのか」と悩んでしまう保育者もいます。そこで園長の島本一男先生は、「園の理念を念頭に置いて書くように」と、保育者に伝えています。「『自分・人・自然』の３つが大好きな子どもを育てる」というこの園の理念が具現化されている保育の場面を切り取って記入するようにしています。

●あゆみノートの表面

記入のポイント
- ◎子どもは発見や学びを繰り返しながら育っていることを伝える
- ◎集団の中での関わり合いによる育ちにも重点を置いて書く
- ◎５Ｗ２Ｈ（いつ、どこで、誰が、何を、どのように、どのくらい、なぜ）を整理する
- ◎肯定的な表現を心がける

写真のポイント
- ◎できれば文章と連動させたいが、本人の他の場面の写真でもよい
- ◎活動の中での子どもの姿や表情がわかる写真を入れる

保護者からの声

「子どものいいところを見よう」と思うようになった。

普段は１か月（幼児の場合は３～４か月）を振り返ることがなかなか難しいので、いい機会になった。

これからの子どもへの関わりかたを考えるうえでとても参考になった。

子どもは日々、いろいろな発見と学びを繰り返しています。しかし、保育の専門家とは違う保護者には、「ただ遊んでいるだけ」と見えてしまうこともあります。エピソードの紹介とその解説によって、子どもの育ちを「証明」することは、あゆみノートの大切な役割です。

「あゆみノートで具体的に伝えることで、見えにくかった育ちが見え、保護者の子どもの見方が広がっていきます。それに伴って子どもへの関わりかたがわかるようになるため、子育て支援にもなります。また保育者が『こんな力を伸ばしたい』といった明確な意図を持って保育に取り組んでいることも理解していただけます」（島本先生）

あゆみノートの文章は、５Ｗ２Ｈ（いつ、どこで、誰が、何を、どのように、どのくらい、なぜ）を、はっきりと書くことを心がけています。こうした要素が含まれていることで文章が客観的になり、保護者が情景を思い浮かべやすくなります。

単なるありのままの姿ではなく心の育ちの物語を伝える

あゆみノートにはどのような文章が記入されるのか、一例を紹介しましょう。

＊

砂場から離れた場所で砂のプリンを作ろうとしていたＢさんは、両手で砂をすくい、数回、砂を運んでいました。そのうちにカップを持って行ったほうがよいことに気付き、カップに砂を山盛りにして運ぶようになりました。そしてカップをひっくり返して上手に砂のプリンを作ると、とてもすごいことをしたと満足げな顔つきになって、友だちに作りかたを教え、プリン屋さんごっこが始まりました。（一部抜粋）

＊

子どもが何かに気づいたり、満足感を覚えたり、他の子どもと交わったり、遊びが展開したりといった場面が、あゆみノートに記されます。単にありのままの姿を書くのではなく、「学び・育ちの物語」として子どもの心を表現することを、特に大切にしています。また写真は紹介するエピソードと同じものが理想ですが、それだとハードルが高いため、本人の他の場面のものでもよいことにしています。

子ども同士のトラブルもまた、成長を伝えるよい機会だといいます。

「トラブルの中には、葛藤やその克服といった、子どもの成長を促す大切な要素が含まれています。保育者の導きによって子どもが気持ちを切り替えて活動を展開させていくプロセスを描くことで、保護者はトラブルが成長のきっかけになることを理解します」（島本先生）

トラブルについて記す際は、誤解を招かないように表現には細心の注意を払います。例えば、「友だちのおもちゃを取った」ではなく、「欲しくなって黙って使った」といった子どもの側に立った書き方をします。

記入にかかわる指導が保育者の個別研修にもなる

保育者が一人ひとりの子どもの育ちをあゆみノートに記入するためには、日頃からしっかりとした思いをもって保育に取り組むとともに、子どもを理解する力をもっていなくてはなりません。

「あゆみノートを書くことは、その時点での子どもの育ちを把握するとともに、明日の保育を考えるベースになります。逆に言えば、きちんと記入できなければ、保育者として必要な視点が不足しているということになります。私はすべてのクラスのあゆみノートに目を通して指導しますが、それが言わば保育者の個別研修のようになっています」（島本先生）

子どもの育ちを丁寧に伝えることで、保護者との信頼関係も積み上がっているといいます。子どもの理解、保育者育成、そして保護者との関係づくりと、あゆみノートは園になくてはならないツールとなっています。

八王子市立長房西保育園

◎社会福祉法人相友会が運営。「自分の意志でやろうと思ったことができる時間と空間と仲間」を大切にして、生きる喜びをみんなと共有する保育を目指している。毎日ブログを更新するなど保護者向けの情報発信にも力を注ぐ。

園長　島本一男先生
所在地　東京都八王子市長房町588都営西8号棟
園児数　定員100人（0～5歳児）

※プロフィールなどは2013年1月末時点（取材時）の情報です。

事例３

個人面談で育ちを共有して子どもを共に育てる関係をつくる

品川区第一日野すこやか園（東京都・公立）

第一日野幼稚園と西五反田第二保育園からなる幼保一体施設の第一日野すこやか園。幼稚園・保育所共に、子どもの育ちを伝えるとともに、保護者との連携を深める機会として、個人面談に工夫をしています。

よい点や気になることを直接保護者に伝え、関係を構築する

話しやすくするための環境の工夫も大切

第一日野すこやか園では、子どもの育ちを伝えるとともに、コミュニケーションを深める機会として、個人面談を大切にしています。

保育所は年１回以上、幼稚園は年２回、個人面談を実施します。保育所は保護者の勤務に合わせて、朝・夕などに面談を実施しています。面談の時間は、幼稚園は20分程度（必要な場合は別の日にゆっくりと時間を取ることもあります）、保育所は30分で設定しています。

個人面談では、最初に保護者の気持ちを受け止めることを大事にしています。５歳児担任（幼稚園）の島倉千絵先生はこう話します。

「まずは気になることなどを話してもらい、耳を傾けます。保護者の話を十分に聞いてからのほうが、こちらの話を受け止めてもらえるからです」

子どもの育ちについて話すときは、よい点やがんばっていることを中心に、エピソードを交えて伝えます。気になることもしっかりと話し、「今後は、このように接していきましょう」と、その後の対応を説明します。

なかには、緊張される保護者もいます。そこで、話しやすくするために座る位置は真正面ではなく斜めにしたり、机に子どもが作った作品を置いて話のきっかけをつくったりといった工夫をしています。

また、少数ですが、園での様子に関心が薄い保護者もいます。そのような保護者こそ個人面談が大事だと、５歳児担任（保育所）の小瀧美行先生は話します。

「『一緒にお子さんの成長を見ていきましょう！』と伝え、忙しくても、できるだけ子どもの育ちに関心をもってもらえるように、子どもの成長した姿を伝えます。最初は消極的な保護者も、『こんな育ちがあったんですよ』などと話すうちに、次第に関心が高まっていきます」

個人面談は、保護者との連携や子育て支援の機会にもなっています。

品川区第一日野すこやか園（第一日野幼稚園・西五反田第二保育園）

◎2010年に幼保一体型施設となる。同じ敷地内に、第一日野小学校、文化センター、図書館などが併設。小学校とは接続カリキュラムを作成している。

園長　丸山智子先生（第一日野幼稚園）、大島正美先生（西五反田第二保育園）
所在地　東京都品川区西五反田６丁目5-6
園児数　70人（第一日野幼稚園・４～５歳児）、130人（西五反田第二保育園・０～５歳児）

園からの情報発信

全国の園長先生の実践例

園の保育内容と子どもの育ちを保護者に知ってもらうため、どのような情報発信を行っているかをうかがいました。

1 写真や動画でリアルな姿を伝える

● 保育中の子どもの様子を撮影したスナップ写真を園で掲示しています。保育者によるコメントも載せて、保育のねらいもお伝えします。保護者は子どものいきいきした表情を見て、安心しているようです。（三重県／公立幼稚園）

● 毎月の誕生会には対象園児の保護者も参加してもらいます。そこでは園生活の様子を撮影した動画をお見せし、園での生活や遊びの姿を伝えています。保護者は「園での様子がわかり、安心して登園できる」と喜んでいます。（埼玉県／私立幼稚園）

● 各クラスにあるホワイトボードに、日々の保育の写真とコメントを掲示するほか、玄関にデジタルサイネージ（電子看板）を設置し、園全体の一日の様子を流しています。連絡帳だけでなく、園児の生活を写真や動画で具体的に知っていただくことで、保護者との信頼関係を築くのに役立てています。（東京都／私立保育園）

2 情報を受け取りやすいようにHPやメールで伝える

● 保護者やその祖父母など希望されるかた全員に、毎日、園の様子をメールで一斉送信しています。それぞれ園児の成長が見られた時や特に伝えたいことがある時には、個別にメール送信もしています。（新潟県／私立幼稚園）

● 最近の保護者は、紙媒体よりもスマートフォンやパソコンの方が目を通してくれる傾向にあるようなので、ホームページやソーシャル・ネットワーキング・サービス（※）を積極的に活用しています。こうした情報発信がきっかけになり、保護者と直接会話する機会が増えました。（佐賀県／私立幼稚園）

● 保育園のホームページ内に保育ブログを設け、保護者だけが閲覧できるページを開設しました。日々の保育の様子を報告しています。始めたばかりですが、徐々に反応が見られています。（兵庫県／私立保育園）

3 電話で直接やりとりしながら伝える

● なかなか連絡帳やおたよりを見てくれない保護者には、電話する時間帯を考慮した上で、担任からこまめに電話連絡をしています。次第に、園の行事や保育方針についても理解を示してくれるようになりました。（愛知県／私立幼稚園）

● 家庭によってはお迎えに来ることが多い祖父母が先に連絡ノートを見ることも考えられます。そのような家庭の場合、大切な話は直接電話で保護者に話すように配慮しています。保護者がお迎えに来るのは年に数回ですが、来られる日は担任とたくさん話をされていて、信頼関係ができていると思います。（静岡県／公立幼稚園）

そのほか、こんなひと工夫も！

● 連絡帳では一方的に情報を伝えるだけでなく、文の最後を「～ですか？」など疑問形で終わるようにしたところ、保育者の問いかけに対して保護者から答えが返って来るようになりました。（京都府／公立幼稚園）

● 行事の後や学期ごとに、子どもの成長について保護者にアンケート調査をしています。後日、懇談会や毎日の送迎時を利用し、その内容をもとに一人ひとりの保護者と話し合っています。（香川県／公立幼稚園）

● 連絡ノートを書く際に心がけているのは、園児の会話などを引用して、園の情景が目に浮かぶようにすることです。（青森県／私立保育園）

※ソーシャル・ネットワーキング・サービス：インターネット上で人とのつながりを構築できるサービスのこと。Facebook、mixi などが知られている。

保護者に対する子どもの育ちの「見える化」
こんなときはどうする？

保護者に対して子どもの育ちを発信していくうえで、難しさを感じている園長先生もいらっしゃるのではないでしょうか。保護者とのつながりを強める発信をするには、どのような工夫が必要なのか、３名の先生にお聞きしました。

回答者

玉川大学教育学部
乳幼児発達学科
准教授
大豆生田啓友先生

港北幼稚園
理事長
渡邉英則先生

長房西保育園
園長
島本一男先生

1 忙しくて時間が取れない

Q 一人ひとりの子どもの育ちを丁寧に整理して伝えたいとは思いますが、忙しくてなかなか時間が取れません。どうすれば負担を軽減できるでしょうか。

A1 写真の活用などで効率化を

大豆生田先生

一人ひとりについて文章で伝えようとすると時間がかかってしまいますので、写真を活用して時間や労力を軽減してみることから始めてみてはいかがでしょうか。写真はそれだけで情報量があり、そこに「みんなでダンゴムシを探しながら散歩しました」といった一文を書き添えるだけで、そのときの情景を伝えることができます。

A2 業務の一本化によって負担を軽減

島本先生

書かなければならない書類はいろいろとありますが、いずれもそのねらいは子ども理解ですから、一本化できる書類や業務があるはずです。例えば、連絡帳と保護者支援をどう結び付けるかを考えれば効率化が進むと思います。また私の園では、パソコンの導入によって業務が効率化しました。データの管理や共有が楽になり、結果的にデスクワークの負担が減りました。

2 育ちの気になる点を伝えるのが難しい

Q 子どもの育ちを伝えるうえで、気になることをどのように伝えれば、保護者に誤解なく理解してもらえるかを悩んでいます。

A1 事実だけでなく、背景にある子どもの思いや対策を伝える

渡邉先生

事実だけでなく、子どもの思いや保育者の考え、さらにその後の見通しを伝えることで、保護者と課題を共有するように心がけています。すぐに手が出てしまう子どもの場合、「こういう状況で、このような思いがあったから」と背景をきちんと伝えます。時には、どうするべきかを明確に判断できないこともあります。そういうときは、正直に「考えているところです」と伝え、「お母さんはどう思われますか」「ご家庭ではどうでしょうか」などと聞いて、子どもを一緒に支えていきたいという気持ちを伝えています。

A2 変化をこまめに聞いたり伝えたりする

島本先生

基本的には、気になることも率直に伝えるようにしています。プラスのことばかりを書くよりも、むしろ「丁寧に見てくれている」という信頼感につながるからです。ただ、伝えっ放しはよくないと思います。お会いしたときに、「この間、書いた件ですけど……」などと説明し、誤解が生じないようにしています。また、その後の変化をこまめに伝え、子どもの育ちを実感してもらえるように心がけています。適宜、個人面談などでも対応しています。

3 反応が返ってこない保護者がいる

Q こちらから積極的に情報を発信しても、あまり反応がなく、うまく伝わっているのかどうか分からないケースがあります。

A1 「急がば回れ」でまずは信頼関係を構築

大豆生田先生

保護者支援は、「急がば回れ」の気持ちが大切です。根本に戻って信頼関係を築くことを心がけましょう。保護者によっては自分のことに精一杯で、子どもの育ちまで頭が回らないかたもいます。そのような保護者には、「お仕事、大変そうですね」などと気遣う言葉をかけてみてください。「自分の気持ちが受け止められている」と感じ、心を開いてくれるようになるかもしれません。一方で、園の行事や活動への参画を促すなどして関心を高めるように努めるとよいと思います。

A2 書くのが苦手な保護者は電話などでフォロー

渡邉先生

こちらが連絡帳で熱心に伝えても、よい反応が得られないケースはあります。そのような場合はまず、「なぜ、書いてくれないのか」「普段からコミュニケーションは取れているのか」などと、原因をよく考えます。単に書くのが苦手だったり、送迎時などに既に十分なコミュニケーションが取れていたり、理由はさまざまでしょう。書くことが苦手な保護者の場合は、電話やお会いしたときなどに話を聞くようにしています。そのような保護者のかたも、連絡帳は楽しみにしてくれていることが多いので、エピソードなどを十分に伝えるようにしています。

4 保護者と意識のズレがある

Q 保育者の願いと、保護者の願いがずれていると感じるとき、保護者にどのように子どもの育ちを伝えればよいのでしょうか。

A1 遊びの中で育っていることを具体的に伝える

渡邉先生

「この園は泥んこ遊びなど単に遊んでいるだけのように見えて心細く思う」とある保護者が心配を口にされたことがあります。遊びの中で何が育っているかを保護者にしっかり伝えることは大切だと思います。文字や数を身につけさせたいと思っていらっしゃる保護者の方に対しては、その思いは受け止め、「今こんなことに興味をもっています」「こんなときに文字を書こうとしていました」などと遊びの中で文字や数だけでなく、その他の学びが育っていることを具体的に伝えるようにしています。

A2 子どもの育ちの見方を保育者として示す

島本先生

子どもの将来を思い、塾やおけいこ事を始めることは、保護者の行動としてよく理解できますし、そのことに対して、園が「それは正しい」「これは違う」などと判断することはできないと思っています。しかし、保護者が用意したそうした場で「子どもがどう楽しんでいるか」「それによって体験を広げているか」という見方を示すことは保育者にこそできることです。そうした形で、保護者に寄り添い続けたいと思っています。